

アザーンのこと

大野 真智子 茨城

母よ

伊沢 玲千葉

並び立つ誘導灯のきらめきに迎へられたり夜の空港

はるばるとイズミルに来つ枕辺の闇をゆらしてアザーンのこと  
窓の外に褐色の曠野ながれゆく労多かりけむ往時のキヤラバン  
さんざめくバザール通り横道に入れば書店のやうな静けさ  
秋の陽のひかりのなかを黙しつつ黒きアバヤのひとたまりゆく  
パンとチーズの香る食事を重ねきてひたぶるに恋ふ日本の白飯

指先のいたく冷たき母の手を両手でつつむ血潮よめぐれ  
この母がわれに授けてくれし血のかよへる手もて母をあたたむ  
昏睡の心のみづうみの渚に寄する波になりたし

酸素マスク浮くほど大きく口をあけあらん限りの息を吸ふ母  
生きるとは息することと渾身の母がさいごにをしへくれたり  
この世からとほくはなれてゆく母よこの世にたつたひとりの母よ

見納め

久葉 堅埼玉

足摺野路菊

土屋 美代子 神奈川

放棄田にハーブを育てる青年に父祖の家売る託すごとくに  
売り渡す生家見めぐり竈神、廁神にもお別れ申す

茶花にと母の植ゑにし侘助がこつそり咲けりこれで見納め  
いつよりかこの古庭に棲みつき蝦蟇よおまへも達者で暮らせ  
佳き日なり遠き縁の婆さまに甲州百目の枯露柿たまふ

これやこの枯露柿甘し二個食べて長者のやうにこころ足らひぬ

葉の散りて裸木となりし庭の梅に尉鶴きて明日は立冬  
しもつきの日々読みつげりわが友の第二歌集の『記憶の蘭』を  
「何しても張り合ひがないよ」夫逝きて十年過ぎたる友ひとりごつ  
黄金の大塔に似て寺庭の公孫樹もみぢが午後の日に照る

分けられし友は逝けども白小花ぎつしり咲けり足摺野路菊

## 見えざる心

相川佑太東京

秋のごきぶり

前中映東京

祖父のためスーパー三軒はしごしてやきいも買ひし冬の日ありしかたはらにもう祖父はなしこがねなるやきいもの蜜いぬとわけあふ人体に見えざる心のあることを知りたり在宅介護三年

かははらの石をつつめりほのじろき夜の両性具有のひかり人間にほひあふれるデパ地下にザツハトルテを買ひもとめたりイルミネーション見つづ歩けば歳晩の顔つきになる人間と大

夏といふバツクボーンを失つておろおろあゆむ秋のごきぶり今われに三分といふ時間あり駅におにぎりのラップをひらく巻き尺をからから鳴らし男らが〈売物件〉を測りはじめつ

映像に血まみれの顔ウクライナの女性兵士はみな志願兵三人ときんもくせいの香を乗せて真昼のバスがバス停を發つてのひらを見せたら泣いてしまふからにぎりこぶしをぶんぶんと振る

## 義父の影

柴田佳美東京

御風の背中

真島陽子\*新渴

病床でからだを起こす義父の影しばらく雨に濡れてゐない影補聴器がおほきくみえる義父のかほ目のあかるさに心慰むはるかなる北斗七星ひきよせてその柄杓にて手を淨めだし「ワシだけど、ワシだワシだよ」詐欺だらう。三日月に似た受話器をおろす耳遠き義父が電話でしらせくる義母の転倒かたゆふぐれにくれなるの落ち葉いちまい冬の水にしたがひてゆくいまのしづけさ

海風に古きガラス戸鳴りつづく相馬御風の文机ある部屋歌集、歌書ならぶ(しみず)で三島手の珈琲カップをひとつあがなう糸魚川大火の空を飛び荒ぶ火玉を語る老舗の店主  
図書館の「木蔭歌集」の棚かこみわれらは若き柊二に出会うK・Iと柊二の恋がよみがえる二十一世紀の図書室の隅  
東京をのがれてのちをふるさとこもりし御風の背中を思う

解らぬままに

塚本文代福井

まるばのき

桑原博大阪

日陰してにはかに冷ゆる生垣の紅きさざんくわ咲きそめて冬  
 心待つ鳴き声ならん朝空のかなたに見えてこはくてうなり  
 柚子の実の油胞うつくしせつせつと生き来し母の透きとほりつつ  
 陽のある蜜柑うつくし遠き日に母が点した明かりのやうな  
 晴れわたる冬のみ空は覗いろ病み臥す母の声にも似たる  
 これの世は結局わからぬことばかり解らぬままにまた歳をとる

かはいいと思ふ心にはじまらん野鳥さがしも自分さがしも  
 自撮りせし妻は大きくわれ小さし背にぴつたりとくれなるもみぢ  
 うぐひすと思へぬ声でやぶに鳴くあれがさうだと妻と聞く秋  
 二人歩く道にたぶのきくぬぎありひのきの林に入りて小暗し  
 山茶花の赤をのがれてまるばのき芭蕉の愛でしきづけさに咲く  
 まるばのきに芭蕉の好みし花咲きてほんほんほんと歳月はあり

時代遅れのコート

今井由美子岐阜

言い訳

飯田進\*兵庫

モノトーンしつとりと胸に沁みきたり昭和レトロのフォト展にある  
 うす墨を流したやうなたそがれは時代遅れのコートが似合ふ  
 ため息をつけば胸處にしづもれり（諦め）といふ言葉の余韻  
 ゆつたりと過ぎゆく時間の温かさ母とふたりのコーヒータイム  
 遠き日の子らの華やぐこゑ聞こゆイヴの夜更けの銀色ブーツ

雪が降るしばし探した和菓子屋に張り紙があり「配達中です」  
 午前二時ホンダのスーパークーパーの音あれば新聞配達の音  
 当たつても嬉しくもない「熊」という今年の漢字、令和七年  
 言い訳は言い訳だから言い訳を絶対しないと言い訳をする  
 てのひらでしつかりおさえて逆目には気を付けながら削る鰹節  
 比喩じやなくメツキが剥げて現れる地金の色にうつとりしている

三日月宗近

小野はつね兵庫

櫻の実ひろふ

百留ななみ山口

思はえずつきしため息聞きとめて友は笑ひぬ秋の陽の中  
金網が囲む空地に咲きたりいちりん十一月のたんぽぽ  
読み聞かす「じ」くの「そうべえ」六歳は「じ」くらくよりもじ「じ」くがいいな  
風落ちし冬の夜に聴く「月光」の無言のごとき音のつらなり  
たれか呼ぶけはひにふりむく古書店の書棚に立てり上林曉  
ねむられぬ冬の夜闇にさえざえと刃光らす（三日月宗近）

感染性廃棄物容器

康哲虎\*兵庫

みかん穫る

浅野千里香川

不特定多数の虫が噴つてるバグるバズるを操る虫が  
愛をくださいとセロテープに書いて蜘蛛の巣にはるクリスマスイブ  
丁寧に文字を書かない医師がいて謎が解けない臨床検査技師  
感染性廃棄物容器に捨てました白いマスクと汚れた言葉  
あと何年生きるのだろう雨水を雨水のまま飲めないわれは  
天国は草の匂いのするところ動物たちと話せるところ

めがねかけ朝日新聞ひろげ読む百寿のははの朝のルーテイン  
あやふきはみづからえらぶ情報か無念無想に櫻の実ひろふ  
ものともの人と人とを繋ぎとめし昭和のエコなる塵紙交換  
朝つぱらドアをたたかれ新聞代ちゃんと払ひき学生のわれ  
朝なさなポストの新聞なくなる日カウントダウンのどのあたり今  
間引きたる人参の赤きらきらし懲りないニンゲンまた奪ひ合ふ